

絵本『おにたのぼうし』を読む(2)

—「思いやり」と「うそ」をめぐる—

古 田 雅 憲

Descriptive Study on the Picture Book “Onita’s Hat” (2)

Masanori Furuta

絵本『おにたのぼうし』(ポプラ社 1969年)はあまんきみこさん(文)といわさきちひろさん(絵)のお二人の手になる作品*10。それはまさしく「共作」と呼ぶのにふさわしく、その文(言葉)と絵との間に表現としての“主従関係”がない——どの頁・場面においても、言葉が絵の“説明書き”にとどまったり、絵が言葉の“なぞり描き”にとどまったりするようなことがない。その言葉と絵とは全体“ひとつの物語”を語り(描き)ながらも、それぞれが表す内容やその現し方にはときに“ずれ”を含んで支えあい響きあいつつ、その神話的にも見える物語世界へ私(読者)を変幻自在にいざなう。今この作品を絵本として味わいたいと願う所以である。

前稿*2では作品前半の言葉と絵を読み味わいながら、特に「ぼうし」の含意をめぐる読み仮説を述べてみた。その主旨は——その「ぼうし」の“向こう側”に、絵には描かれず言葉にも語られない《黒鬼のとうさん・かあさん》の“気配”を感じ取ってこそ、この物語はその“力”をいっそう鮮やかに現すのではないか——ということ。言い換えれば〈おにた〉にとって「ぼうし」とは、何かわけあって今は別れ別れになってしまった(もしかするともうないかもしれない)《黒鬼のとうさん・かあさん》のことをまざまざと思い起こさせる、言うなれば“よすが”だったということ——そういう読みの仮説である。

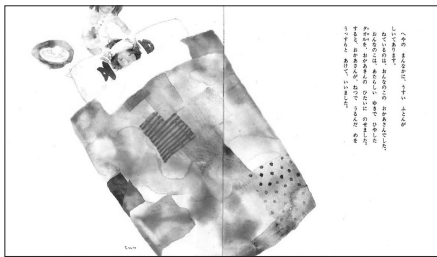
「ほうし」をかぶるたび〈おにた〉は、たとえば（いいかい、無事に暮らしていくために人前ではこれをいつもかぶっておくんだよ）などと言いつつ聞かせながら幼い自分にそれを授けてくれた《とうさん・かあさん》のことを思い出す。（だから〈おにた〉はけっして人前でそれを脱がない。）それから《とうさん・かあさん》がきっと“善良な者”であったことも。（だから〈おにた〉は「おににもいろいろある」と身を以て知っている。）——〈おにた〉にとってその「ほうし」は、もちろん「つのかくし」のための“もの”ではあるけれど、孤独の放浪のなか、さまざまな現実的な痛みにも心身を苛まれていてなお“親子の愛情の絆”と“善良さ”を信じて生きるための“よすが”でもあった。（だからこそ〈おにた〉がそれを置いてどこかに去った結末は重大なのだ。）

そのような読みの仮説を踏まえて——《黒鬼のとうさん・かあさん》の気配を感じつつ——本稿では特に登場人物たちの示す「思いやり」と「うそ」に注目しながら、作品の言葉と絵を読み進めてみたいと思うのだ。

なお念のため最初に明記しておきたい——以下に掲げる図版と本文はすべて、あまんきみこさん（文）・いわさきちひろさん（絵）の手になる『おにたのほうし』（ポプラ社 1969 年）から法令の趣旨に遵って引用した。

【15-16 頁の絵と言葉】

（下の図版及び本文は後掲・註 1 に明記した書籍から法令の趣旨に遵って引用した。）



天井のはりの上に隠れている〈おにた〉がこっそり見下ろした情景だ。前場面に引き続き（前稿参照）、いわずきさんは〈おにた〉の視点に寄り添って、言わば“おにたの代弁者”としてこの絵を描いた。だから

私（読者）もまた〈おにた〉自身になって、この情景をそのまま見つめている（ような気になる）。

部屋の真真中に布団が敷いてある。掛け布団はさまざまな色や柄の布でもって上手に繕われている。時々の傷みをそのつど丁寧に直しながら、長いこと大

事に使いなしてきたのだろう。襟元には洗濯の行き届いたらしい真っ白なカバーがかぶせてある——この小さい家に住まう家族は、やりくりの難しい暮らし向きの中なかでも(前稿参照)、清潔を旨として丁寧に生活を営んできたのだ。

その布団には誰人か目をつむって横になっている。その人の面差しや掛け布団の膨らみ具合などから察するに大人の女性らしい。その人はたぶん病気なのだ。今も高い熱がある——水枕を当てているのは身体にこもる熱を冷ますためだ。絶えず悪寒もしているのだ、だから首もとまで布団にくるまって。雪が降り積もる冬の夜、すきま風が忍び込むような、また台所にも風呂場にも火の気がないような家(前稿参照)であれば無理からぬこと。

枕もとに座っているのは、〈おにた〉が先ほどかゝいま見た〈おんなのこ〉だ(前稿参照)。女性に寄り添って、その人の額にタオルを広げている——熱冷ましのための濡れタオルだ。幼いながら懸命に看病しているのだ。きっと忍び込むすきま風に身を震わせて、冷たさに手や足の指を真っ赤にさせているだろう。彼女が看病している相手はもちろん大切な人——その人はたぶん母親だ。(読者はきっとそう思う、何の確証もないのだけれど。)

娘は大切な人(たぶん母親)が寝ついてさぞ心細いだろうに、お医者さまを呼んだり薬を買い求めたり周囲の人に助けを求めたりできないのだ——この小さい家に住まう家族はとても貧しくて、また周囲の人々からも孤立しているからだ(前稿参照)。娘がその人のためにできることは、外ですくってきた雪水でタオルを冷やし、それを額に当ててあげることだけだ。娘の健気さとともに、この家族の困窮と周囲からの孤立をあらためて強く印象づける絵である。

それにしても父親はどうしたろう——鎌田均さん*3は次のようにおっしゃる。

この家庭に父親は登場しない。そこから母親の病気の事情が窺える。おそらくは生計を立てるために無理を重ねたのだろう。「うすいふとん」「台所のまどのやぶれ」「かんからかんにかわい」た台所等を思い合わせると、第二場面での想像以上に極貧の生活であるし、母親の病気は昨日今日寝込んだものとは思えない。

この絵が〈おにた〉の視点に寄り添って描かれたものであるからには、私（読者）が気づくあれこれのことは〈おにた〉の気づきでもある——だから〈おにた〉もまた二人の様子をじっと見つめながら（ああ、あの子がさっき洗面器をもって外に出てきたのは、タオルを濡らす雪水をすくうためだったんだ…）ときっと気づいている。（そうか、きとお母さんの看病を一生懸命にしているんだな、なんて頑張り屋さんなんだろう、それにしてもお父さんはどうしたのかしらん…）などとも。

そして〈おにた〉は今、その親子の様子を見守りながら《黒鬼のとうさん・かあさん》のことを思い出し、自分自身と《とうさん・かあさん》との間にもあった確かな“親子の愛情の絆”についてきつと思いを馳せている——と言うのも、自分自身の境涯との“同一視”を伴う強い“感情移入”が〈おにた〉の心のなかに芽生えればこそ、この先、娘がうそまでついて母親を慰めようとしていることを知ったとき、〈おにた〉は「なぜか、せなかがむずむずするようで、じっとしていられなくなり」、ついには「もうむちゅうで、だいどころのまどのやぶれたところから、さむいそとへとびだしてい」くことになるのだろうから。



物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

へやのまんなかに、うすいふとんがしいてあります。
 ねているのは、おんなのこのおかあさんでした。
 おんなのこは、あたらしいゆきでひやしたタオルを、おかあさんのひたいにのせました。すると、おかあさんが、ねつでうるんだめをうすらとあけて、いいました。

〈語り手〉は“世界を見守る者”として第三者的な視点から言葉を紡ぐだけでなく——これまでもそうであったように——時に“おにたの代弁者”としても振る舞う。ここでの語りもまた、添えられた絵が〈おにた〉の視点に寄り添って描かれていることもあって、よけいに〈おにた〉自身の認知を表すも

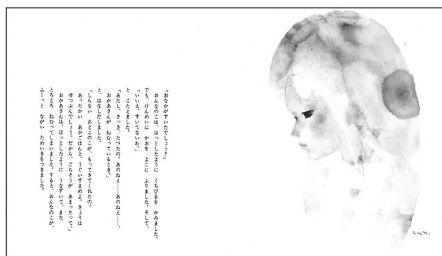
のとして受け止められる。

だから「ねているのは、おんなのこの おかあさんでした。」と続く語りは、その実〈おにた〉自身が（むろん読者も）まだ定かには知り得ぬ事柄であるにも関わらず——と言うのも、次の場面で〈おんなのこ〉の口から「おかあさん」という言葉が出てくるまで、それ以前にはっきりそれとわかる描写はないのだから——そのまま〈おにた〉自身の（また読者の）事実認識にすり替わる。（やっぱり二人は親子だったんだ。）

〈おかあさん〉は真冬に使うには「うすい ふとん」に（高い熱があるにも関わらず）伏せている。〈おんなのこ〉はたびたび外に出て「あたらしい ゆき」をすくってきては看病を続けている。ふと〈おかあさん〉が「ねつでうるんだめを うっすらと」開けた。その人がどんな言葉を発するのか——〈おにた〉は固唾をのんで見守っている。私（読者）もまた。

【17-18 頁の絵と言葉】

（下の図版及び本文は後掲・註1に明記した書籍から法令の趣旨に遵って引用した。）



うつむきかげんの〈おんなのこ〉の横顔——伏し目がちでさびしげで。彼女もまた〈おかあさん〉の口もとを見つめているには違いないが、もしや心ここにあらず、ひとり途方に暮れ、もの思いに沈んでいる様子。

彼女の髪色は淡い絵の具の色々をたらしこんで描かれているが、その最後に墨が一点、ぼとりと添えられた。それがゆっくりとにじんできていく——まるで幼い心のなかを過ぎった陰りが、どうしようもなく次第に大きくなっていくかのよう。彼女の孤独なもの思いが次第に深く濃くなっていくかのよう。



物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

「おなかがすいたでしょう？」

おんなのこは、はっとしたように くちびるを かみました。でも、けん

めいにかおをよこにふりました。そして、「いいえ、すいてないわ。」とこたえました。

「あたし、さっき、たべたの。あのねえ...あのねえ...、おかあさんがねむっているとき。」と、はなしました。

「しらないおとこのこが、もってきてくれたの。」

「あったかいあかごはんと、うぐいすまめよ。きょうはせつぶんでしょう。だから、ごちそうがあまったって。」

おかあさんは、ほっとしたようにうなずいて、またとろとろねむってしまいました。すると、おんなのこが、ふーとながいためいきをつきました。

娘に食事を用意してやれないでいる母親が「おなかがすいたでしょう?」と気遣ったのに応えて、娘は「しらないおとこのこが、もってきてくれた」(ごちそうを食べたから大丈夫)と慰めた。

娘の言葉はもちろんうそだ——私(読者)はこの家族の孤立のほどをとくに知っているから、そういう僥倖などあろうはずもないことぐらい容易に分かる。それは拙いうそだ。幼い思いやりから発した拙いうそだ。

娘は母親の気遣いにどう応えたものか、うそをつくことに一瞬ためらいながらも——「はっとしたようにくちびるをか」みながらも——病身の母親を心配させるわけにはいかないと思ったのだ。そして幼いながら懸命に場を取り繕った。繰り返される「あのねえ」と「...」(沈黙)は、その「思いやり」と「ためらい」と「懸命さ」を哀れと見えるほどに表している。娘の健気さが私の胸を強くうつ。加えて「あったかいあかごはんと、うぐいすまめよ」とこまごまと言い重ねるのを聞くに及んでは、もう痛々しくて耳を塞ぎたくなるほどだ。

もちろん娘のうそに気づいているのは私(読者)ばかりではない——母親もまたきつと見抜いている。自分たち家族の孤立のほどに彼女が思い至らぬはずもないから。知らない男の子が来てご馳走をお裾分けしてくれた、などとは

大人にすればとっぴな話*4。なにせ日ごろから丁寧に暮らしを営んでいた親子だ、娘が見せたわずかなためらいと懸命さに母親が気づかぬはずがない。どんなに体調がすぐれなくとも、それと気づかぬことがあろうものか。

だから〈語り手〉が「おかあさんは、ほっとしたようにうなずいて」(傍点一論者)と言うのは、この親子のことをまだよくは知らない〈おにた〉にそのように見えた、ということにすぎない。母親は、娘に食事を用意してやれないでいることに、また娘がうそまでついて自分への思いやりを示していることに、いよいよ悲嘆を重ねながらも(「ほっと」などできるはずもなく)、また娘のことを限りなくとおしく思いながらも、しかし身体の不調には耐えられず「また、とろとろねむってしま」ったのだ。母親の悲しみが私の胸を強くうつ。

かたや娘は母親の心の奥を見抜けない。〈語り手〉が「おかあさんは、ほっとしたようにうなずいて」と言うのは、(母親をどうにか安心させてあげられた)と思った幼い娘にそのように見えた、ということでもある。〈語り手〉が続けて「おんなのこが、ふーっとながいためいきをつきました」と言うのは、うそをつくことへのためらいと、うそまでついて示した思いやりの懸命さと、その懸命さが報われた(と誤解した)安堵と——もちろんひもじさのせいと明日への不安と——そういう複雑な心の揺れ動きなかから思わず知らずこぼれた「ながいためいき」だったはずだ。哀しい母親と幼い娘と、互いに交わしあう深い愛情の絆と、またそれゆえに生じるすれ違いとがあらためて私の胸を強くうつ。

先ほどから親子の様子をうかがっていた〈おにた〉は、その「ながいためいき」に接して、ようやく何かわけがありそうなことに気づいたのだ——もっとも〈語り手〉が次の場面の冒頭で「おにたはなぜか、せなかがむずむずするようで、じっとしてられなくなりました。」(傍点一論者)と言うように、このときの〈おにた〉はその「わけ」の子細までは知らずにいるのだけれども。



このとき娘がついたうそ——思いやりから発したうそのことを「思いやりのうそ」と言うことがあるらしい*5。およそ「思いやり」であれ「うそ」であれ、しかるべき心の育ちのなかで子供がようやく体得するものであるならば、まし

て「思いやりのうそ」とはいっそう多様で豊かな育ちを経て現れるものと言うべきなのだろう*6。

そういう「思いやりのうそ」を口にすることができたからには、この娘の心もまた多様で豊かに育ちつつあったと見てよいのだろう——彼女は、母親の様子と自身の置かれた状況をしっかりと見て取ったうえで、母親の気持ちを自分のことのように感じ取り、その場面にふさわしい行動（言うべきこと・為すべきこと）を自分なりに考え、それを実際に現すことができたのだから。そのことを発達心理学の手引き書*7に使われている語句を踏まえて言い換えるならば、彼女は自他の状況を「認知」*8し、その内容に従って他者の内面を想像し「共感」*9し、その情感に即して、その場に必要とされる「行動」*10を考えたうえで、それを実行する「スキル」*11を備えている——言わば認知力、想像力、共感力、思考力、表現力などなどをそれなりに身につけている（彼女のうそが「拙いうそ」であったからには、またそのうそが母親を慰めたと容易に思い込んでしまったからには、いずれの能力もまた未熟な——それなりの——ものであったには違いないのだけれども。）

およそ子供が認知力、想像力、共感力、思考力、表現力などなどを身につけていくには、さまざまな人々と関わりながら過ごす日々の生活のなかで、さまざまな体験を——むろん身近な大人による必要十分な支えを受けながら——豊かに積み重ねていくことが不可欠である。「思いやりのうそ」を口にすることができた〈おんなのこ〉もまた、そのような育ちの過程にあったはずだ。

その〈おんなのこ〉の育ちの姿を、たとえば「保育所保育指針」*12の表現を踏まえながら具体的に想像するならば——この〈おんなのこ〉は、物語に描かれ語られた今でこそ母親の病と暮らしの困窮と周囲からの孤立のなかでつらい思いをしているが、きっと以前は（それがいつとは定かならねど）、家族と過ごす「十分に養護の行き届いた環境」*13の「くつろいだ雰囲気の中」*14で「様々な欲求を満たし」*15ながら、周囲の（家族やたぶんご近所の）大人たちに支えられて（たぶんご近所の同年齢・異年齢の子供たちとも一緒に）心身とも健康な暮らしを営んでいた。そして、そのような安定的な暮らしのなかで〈おんなのこ〉は「生活に必要な基本的な習慣や態度」*16や「人に対する愛情

と信頼感」*17 や「自主、自立及び協調の態度」*18などを身につけつつあった。

この〈おんなのこ〉はきっとそういう子供だ、あのような「思いやりのうそ」を口にしてまで母親を慰めようとするのだから。またそうまでして彼女が母親を思いやるのは、母親もまた常日頃から彼女を大切に慈しんでいたからだし、そのことを彼女自身がよく感じ取っていたからだ——たとえば彼女が着ている白いワンピースのこと一つでも思い返しさえすればよい。大きな肘あてがあって長く着ているらしい服だけれども、色とりどりのきれいなボタンが付けてあって、その肘あてだって黄色や青のととてもきれいな布で上手に繕われていて、またいかにも清潔そうに全体まっ白に洗濯されていて（前稿参照）。彼女の母親が、今の厳しい暮らし向きのなかでさえも、娘のことを大切に慈しんでいることがよく分かるというもの——きっと以前から変わらぬことなのだ。

この場面の向こう側に私が思い浮かべるのは、そういう子供の姿である。今年の節分の夜、あちらこちらをさまよった末に〈おにた〉が巡りあったのは、そういう〈おんなのこ〉だった。そしてまた娘をそのように育てている〈おかあさん〉だった。

【19-20 頁の絵と言葉】

（下の図版及び本文は後掲・註1に明記した書籍から法令の趣旨に違って引用した。）



場面一転——天井の^りよりから上手にぶら下がった〈おにた〉がうかがっているのは、この小さい家の台所だ。

蛇口を1つだけ備えた簡単な流し台がある。流しのなかにはまな板と包丁と蓋を外した両手鍋が置かれている。が、どれも使われたような感じがしない。それもそのはず、竹（か籐か）で編んだ籠（米麦や豆や野菜などの食材を入れておくのに使うのだらう）や青いパール（水気のある調理くずなどを入れるのに使うのだらう）はどちらも空っぽだ。たぶん昨日今日、食事を作っていないのだ。なるほど出番のない菜箸やおたまやフライ返しは傍らの棚に下げ

られたまま、しょんぼりと肩を落としているよう。二人分のお茶碗とお汁椀も棚の上にきれいに重ねられたまま、ちんまりと身をすくめているよう。それにしても二人分のお茶碗とお汁椀とは——やはり父親はここにはいなかったのだ。(家族にどんな事情があったのだろう。)

そういう台所の様子を見て〈おにた〉もまた、さっき〈おんなのこ〉が「ながい ためいき」をついた詳しいわけを悟ったのだ——親子二人っきりの寂しさと貧しさと(たぶん)周囲に頼れる相手の一人もいないこと。それから、この〈おんなのこ〉がうそをついていること、本当はつらい思いをしていること、それでも〈おかあさん〉を心配させまいと懸命であること、(きっと〈おかあさん〉もまたつらい思いをしていることさえ)——〈おにた〉はすっかり悟ったのだ。

今しも〈おにた〉は(人目につくはずもないのに)やっぱり「ぼうし」をかぶっている——〈おにた〉は自分自身と《黒鬼のとうさん・かあさん》の姿を思いだし、その様子を目の前の〈おんなのこ〉と〈おかあさん〉の姿に重ねあわせ、そこに結ばれているだろう深い“親子の愛情の絆”と彼らの“善良さ”を自分たち自身のことのように感じ取っているのだろう。であればこそ、彼はこの親子のために(何かしたい、何かしなくっちゃ)と思いつめるのだ——しっかりと開かれた左の手のひらの力みが、その瞬間の〈おにた〉の驚きと緊張と決意を表しているだろう。(たとえば寺域の静謐と仏法僧の聖性を守るため、楼門脇に掌を広げて決然と立つ仁王様みたく。)



物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

おにたはなぜか、せなかがむずむずするようで、じっとしてられなくなりました。それで、こっそり かりをつたって、だいどころにしてみました。

(ははあん……)

だいどころは、かんからかんにかわいています。こめつぶひとつありません。だいこんひとときれありません。

(あのちび、なにもたべちゃいないんだ)

おにたは、もうむちゅうで、だいどころのまどのやぶれたところから、さむいそとへとびだしていきました。

それからしばらくして、

この場面に添えられた絵は第三者的な視点から描かれているのだけれども、〈語り手〉の言葉は〈おにた〉の内面から語り起こされているうえ、途中〈おにた〉の内言を語ってもいるから、全体いかにも“おにたの代弁者”が〈おにた〉自身の認知を語り進めているように受け止められる——台所のそこそこが（流しのなかもペールのなかも）「かんからかんにかわいてい」て、どこにも（竹か籐かで編んだ籠のなかにも）「こめつぶひとつ」「だいこんひとときれ」もないことを自身の目で確かめたとき、〈おにた〉もまたこの小さい家に住む家族の事情と〈おんなのこ〉がついた「ながいためいき」の含意をすっかり理解した（想像し共感した）のだった。



この〈おにた〉という子供もまた——〈おんなのこ〉と同じように——認知力、想像力、共感力、思考力、表現力などなどをそれなりに身につけている。彼は目の前の親子の様子と自身の置かれた状況をしっかりと見て取ったうえで、親と子それぞれの気持ちを自分のことのように感じ取り、その場面にふさわしい行動（言うべきこと・為すべきこと）を自分なりに考え、それを実際に現すことができる子供なのだった——彼が「もうむちゅうで、だいどころのまどのやぶれたところから、さむいそとへとびだしてい」くのはその現れだ。

さてはどこかに何かあてでもあるのか、それを思いだし慌てて出ていったのか——私（読者）は（この親子をなんとか助け慰めてくれるなら良いが）と念じながら、〈おにた〉の帰りを「しばらく」待つよりほかもない。



寒さをしのぐための棲みかをようやく見つけたばかりだというのに、今また〈おにた〉は「さむいそとへとびだしてい」こうとする——目の前の親子のために（何かしたい、何かしなくっちゃ）と強く思ったからだ。

このく・だりについて鎌田均さん*19が次のように指摘していらっしゃる。

「おにたはせなかがむずむずしてじっとしてられなく」なり「もうむちゅうで」飛び出してってしまう。その際「おにた」は「あのちび」と女の子のことを指して言う。これはもちろん蔑称ではなく、心理的距離がぐっと縮まったことを伝えている。まるで妹を呼ぶような呼称である。同情からではなく明らかに「おにた」は女の子に近いものを感じている。ここで第一場面におけるまこと君の家での「おにた」の行為が思い出される。本当の自分を見せたいけれど隠さずにはられない健気で悲しい「おにた」の生の姿が、そのまま女の子に重ねられるのではないか。同情として読んでは、第五場面の自己犠牲と矛盾する。「おにた」は女の子に健気にも悲しい自分の姿を見たのだと読めば、飛び出してゆく衝動もその後の行動も辻褄が合ってくる。(下線一論者)

なるほど、思い返せば「きのいいおにでした」と称される〈おにた〉だった。〈まことくん〉ちで(どうか自分を認めてもらいたい)とばかり、あれやこれやの善行に励んだものである。(しかし人目を恐れてこっそりと。)今また「さむいそとへとびだしてい」こうとするのは、そういう持ち前の「気の良さ」を発揮してのことでもあろうとは思うけれども、〈語り手〉が「もうむちゅうで」と言うのであれば、やはり「気の良さ」ばかりではどうにもあるまい。〈おにた〉は、もっと衝動的で情熱的で切迫した強い感情にとらわれたまま(わけも分からないまま)居ても立ってもいられずに(ああ、じっとなんかしてられない)とばかり、この親子のためにせき立てられるように再び外へ飛び出していったのだ——「もうむちゅうで」とはそういうことだ。

あらためて思い返せば〈まことくん〉ちは暮らしに困窮してないし、周囲から孤立もしてないし、〈まことくん〉もその家族もうそまでついて思いやりあわなければならないような状況にもなかった。せいぜいビー玉をなくしたり、外に干した洗濯物が急な雨に濡れそうになったり、お父さんの靴が汚れていたり(ぐらいのこと)だった。

それに比べて、この小さい家に住まう親子ときたら二人きりで寂しくて貧しくて、まわりの人に頼ることもできないまま、〈おんなのこ〉は病気の〈おかあさん〉を看病しながら、時にうそをついてまで懸命に慰めようとしているし、〈おかあさん〉もまた娘の思いを知るほどにいつそう悲しみを募らせているし。でもどうしようもなくて。

これまで〈おにた〉は、みずから善良な者であろうと固く決心し、そう振る舞いながらもなお望むようには紡がれない人間（周囲の他者）との関係にわだかまりや悲しみを覚えつつ、たとえ毎年の節分ごとに豆をなげうたれ、柀のどげに目を刺され（そうになり）、さまよう道々の雪や霜に手足を凍えさせていようとも、しかしだからと言って相手や周囲に対する怒りや抗議を表わすことはせず（ただ静かに状況を受け入れて）、むしろそういう関係性しか紡げない責任を自分の側に求め、そういう自分を隠すことで当面の平穏を得て生きてきた——そういう〈おにた〉の生きる“よすが”となったのが「ぼうし」である（前稿参照）。

前稿で提案した読みの仮説——その「ぼうし」をかぶるたび〈おにた〉は、たとえば（いいかい、無事に暮らしていくために人前ではこれをいつもかぶっておくんだよ）などと言い聞かせながら幼い自分にそれを授けてくれた《黒鬼のとうさん・かあさん》のことを思い出す。それから彼らがきつと“善良な者”であったことも。〈おにた〉にとってその「ぼうし」は、もちろん「つのかくし」のためのものではあるけれど、孤独の放浪のなか、さまざまな現実的な痛み[・]に心身を苛まれていてなお“親子の愛情の絆”と“善良さ”を信じて生きるための“よすが”でもあった——前稿で提案したのはそういう仮説だ。

そういう〈おにた〉であればこそ、彼が今、目の前の親子が表す“善良さ”や“愛情の絆”に自分自身と《黒鬼のとうさん・かあさん》の姿を重ねあわせ、その〈おかあさん〉の悲しみを思いやるとともに、特に〈おんなのこ〉の感じている“痛み”や“生きづらさ”を自分のこととして感じ取り、またその“痛み”“生きづらさ”を黙って引き受けている姿に自分自身の姿を重ねあわせるのは、考えてみれば自然のことだ。そういう〈おにた〉であればこそ、目の前の親子のために（何かしたい、何かしなければならない）というような衝動的

で情熱的で切迫した強い感情にとらわれたまま（わけも分からないまま）居ても立ってもいられずに、（ああ、じっとなんかしてられない）とばかり、せき立てられるように再び外へ飛び出していったのだ。



あのちび——衝動的で情熱的で切迫した強い感情にとらわれたまま〈おにた〉は〈おんなのこ〉のことを心のなかでそう呼んだ。彼女の名前をまだ知らない（結局、知らずじまいになってしまったようだけれど）、その〈おにた〉が彼女のことを何と呼ぼうが——（あのおんなのこ）でも（あのこ）でも（あいつ）などでも何と呼ぼうが良かったはずだが、彼は彼女のことを心のなかで（あのちび）と呼んだのだ。

その呼び方が帯びる意味あいは重要だ——たとえば田中実さん*20は次のようにおっしゃる。

まこと君のていねいな「まめまき」が物置小屋におよんだとき、小さな黒鬼「おにた」という名前で呼ばれる主人公が登場する。まこと君は童話らしく通常の三人称で「くん」が付いて登場するが、ヒーローとヒロインの名付け方にこの作品の重要なポイントがある。語り手はこの子をいかにも鬼の男の子らしい名前でお・に・たと呼ぶ。ところが女の子はただ「おんなのこ」としか呼ばれていない。無論その子の母親も名付けられていない。「おにた」の方は女の子を「あのちび」と妹のような愛称で親しげに呼んでいる。「おにた」という呼称に対し、「おんなのこ」と一般名詞でしか呼んでいないのは、語り手が女の子の方をただ素っ気なく扱っているからである。恐らくそれには訳がある。（下線・傍点—論者）

また鎌田均さん*21は次のようにおっしゃる。

その際「おにた」は「あのちび」と女の子のことを指して言う。これはもちろん蔑称ではなく、心理的距離がぐっと縮まったことを伝えている。まるで妹を呼ぶような呼称である。同情からではなく明らかに「おにた」は女の子に近しいものを感じている。（下線・傍点—論者）

さらに木村功さん*22 もまた。

女の子の言動に、母親に対する気遣いを見て取ったおにたは、その理由を、台所で見出したのである。そこには、(米つぶ一つ)〈大根一切れ〉も見当たらない〈かんからかんにかわいた〉台所があったのだった。〈気のいいおに〉であっても鬼ゆえに姿を人間の前に現すことができないおにたは、空腹であっても病気の母親にそのことを言い出せない女の子の優しさに共感したのである。ここに到って、おにたの女の子に対する親愛の思いが募っていることが、「あのちび」という言葉や、その後(もうむちゅうで)、〈さむい外へとび出して〉行った姿に認められる。

このように語り手は、女の子に対するおにたの親愛感が昂進していく様を描き出すことで、おにたが遂に人間の前にその姿を現すに到るその理由、すなわち自分の空腹を我慢して母親を看病し思いやる女の子であればこそ、おにたを受け入れてくれる可能性を見出していることを描くのである。(下線・傍点—論者)

「ちび」という言葉——“自分よりも小さかったり幼かったりする相手”に向けて、その相手の小ささ・幼さゆえに“相手をちょっと軽く見るニュアンス”を帯びて(“上から目線”で)、また“気取りを感じさせない率直さ”の現れとして、しかし近しい間柄にあるとの思い入れのもとでは“親愛の情”を込めて——たがいの関係性のなかで多様な意味あいを帯びる、とても微妙で豊かな表現だ。

みなさんがおっしゃるとおり、〈おにた〉は〈おんなのこ〉のことを自分より小さくて幼い存在だと感じ、その小ささ・幼さゆえにちょっと軽く見ながら、しかし同時に親愛の情を気取りなく率直に表して「ちび」と呼んだのだ、あたかも自分が実の“兄貴”であるかのように、まるで彼女が実の“妹”であるかのように。

——となれば、そのとき〈おかあさん〉がまた実の“母親”であるかのような存在になったことも見過ごしたくない。その〈おんなのこ〉を「ちび」と

呼ぶことで“兄貴”は、自分と同じようにつらい思いをしながら暮らしている“妹”に向けて、うそをついてまで病身の母親を慰めようとしている小さくて幼い“妹”に向けて——たとえば（ちびのくせして無理するんじゃないよ、お兄ちゃんが何とかするからさ…）（ちびのくせにそんなに頑張らなくていいんだよ、お母さんのこともお兄ちゃんが何とかするからさ…）といったような深いいたわりの気持ちを表しているのだ。それもそのはず、〈おにた〉は目の前の親子に対して、自分自身の境涯との“同一視”を伴う強い“感情移入”を覚えているのだから。

私（読者）はその様子を見ながら（自分だってちびのくせに…）と思う——そう、〈おにた〉は「小さなくろおにのこども」だった。その「こども」が“兄貴”としての自負から“母と妹”の窮状を救うべく立ち上がろうとしている——その「ちび」の健気さが、今あらためて私の胸を強くうつ。（以下、次稿に続く。）

[註]

- 1) あまんきみこ（文）・いわさきちひろ（絵）（1969）『おにたのほうし』（ポプラ社）
- 2) 古田雅憲（2021）「絵本『おにたのほうし』を読む（1）—「ほうし」の含意を中心に—」（『西南学院大学人間科学論集』17（1）西南学院大学学術研究所）
- 3) 鎌田均（2003）「『読み』のベクトル—『おにたのほうし』の場合」（『日本文学』52（3）日本文学協会）17p.
- 4) うそをつくなら「自分で作って食べたから大丈夫」などと言っても良かったはずだ。看病が務められる娘なのだ——母親に代わってありあわせの食事の支度くらいできるだろうから。「知らないおとこのこが…」と言うのに比べればよほど「現実的な」うそだったはずだ。でも彼女はそうは言わなかった——支度をしようにも台所には少しばかりの食材もなかったから。実際、娘にしても苦しいうそだったに違いない。
- 5) 島義弘（2014）「幼児期の葛藤抑制の発達と“思いやりの嘘”」（『鹿児島大学教育学部研究紀要』66）
- 6) 「うそ」と「思いやり」をめぐる子供の心の育ちについて、西南学院大学人間科学部（心理学科）の井上久美子先生から、特に下掲のご論考二篇に基づいてご教示いただいた。
 - ・溝川藍（2007）「幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解」（『発達心理学研究』18（3）日本発達心理学会）
 - ・藤戸麻美／矢藤優子（2015）「幼児におけるうそ行動の認知的基盤の検討」（『発達心理学研究』26（2）日本発達心理学会）

7) 東洋／繁多進／田島信元編集企画 (1992)『発達心理学ハンドブック』(福村出版) 807-825p.

8～11) カギ括弧で括った語句は上掲・註7の書籍から引用した表現である。

12) 厚生労働省 (2017)『保育所保育指針』(厚生労働省告示第117号)

同告示の「第1章 総則——1 保育所保育に関する基本原則——(2) 保育の目標」の「ア」として以下の記述(ア)～(カ)が示されている。(下線は論者が私に付したもので、いずれも拙稿中に引用したことを示す。)

ア 保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。

(ア) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。

(イ) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。

(ウ) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。

(エ) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。

(オ) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。

(カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。

13～18) カギ括弧で括った語句は上掲・註12の文書から引用した表現(上の引用文中に論者が私に下線を付した箇所)である。

19) 上掲・註3に同じ。18p.

20) 田中実 (2001)「メタプロットを探る「読み方・読まれ方」——『おにたのぼうし』を『ごんぎつね』と対照しながら——」(田中実／須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編3年』教育出版2001年) 13p.

21) 上掲・註3に同じ。18p.

22) 木村功 (2006)「教科書教材を「読む」(Ⅳ)・あまんきみこ「おにたのぼうし」論」(「岡山大学教育学部研究集録」133) 24p.